

筈がなく、駅のプラットホームは自由席へ乗るための長蛇の列、一瞬我が目を疑いました。とりあえず京都に着けばいい、覚悟を決め列車に乗り込んだものの、案の定座ることは出来ず約10時間程を過ごすこととなりました。大きなリュックと荷物をもった女の子の一人旅。「家出でもしてきたんじゃないのかな」と思われていたのではないのでしょうか。岡山に近づいた時、私の肩をたたく人がいました。「岡山で降りるから、ここに座りなさい。」二人連れの中年の男性でした。偶然近くにいた私に声を掛けてくれたのだと思いますが、思いがけないとでもありがたい言葉、お礼を言い、席に着くと、その男性は私の荷物を網棚にのせてくれ、列車を後にしていきます。その男性の顔をもう思い出すことは出来ませんが、その優しい言葉と行動を私は決して忘れることはないでしょう。博多駅の長蛇の列を見た時から始まったちよつと憂鬱な旅も、優しい旅先での出会いにより楽しい旅となりました。

京都では、様々な場所を歩き、色々な物にふれました。その中であるお寺に貼ってあった一枚の紙、それに書かれていた文字を今でもなぜか覚えてます。「子供叱るな来た道だ、年寄り笑うな行く道だ。」考えてみれば、何の変哲もない当たり前のことを表した言葉ですが、私はこの言葉に色々と考えさせられました。過去・現在・未来という時間軸の上で生活しているながら、つ

い「今」だけを見つめてしまいがちになることを戒められているようにも思いました。決して子供を叱ってはいけない、絶対にお年寄りを笑ってはいけないということではなく、「自分もやってきたことでしょうか、そんなに偉そうに叱れるの?」とそして「あなたはいずれは年をとり、同じようなことをするんでしょ」とそう問い掛けられているように感じました。そう感じるのは私だけでしょうか?子供を可愛がり、お年寄りを敬いなさい、と言っているのかもしれない。来た道を戻り子供にかえることはできませんが、仕事上たくさんのお年寄りとお会いすることができます。少し先の未来に向けて、たくさんのお手本を前に、優しくかわいなおばあちゃんを目指して頑張っていきたいなと思いました。

昨年の京都への旅は、人とのよい出会いに始まり、古きよき街を歩くことにより、色々なことを考えさせられる旅でした。さて、今年はどこに旅行に行こうかと、そろそろ考えはじめているところです。

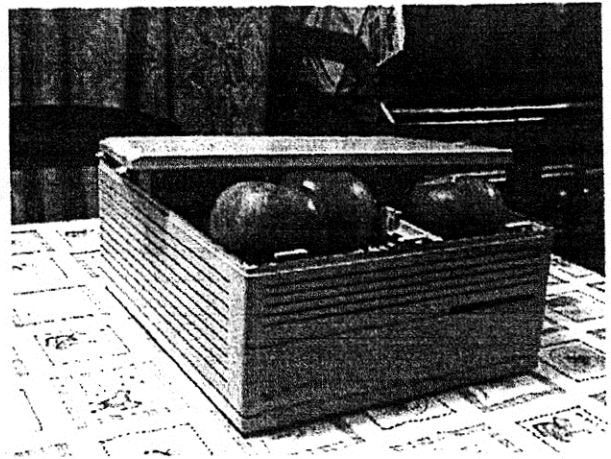


「あなたに来ると私はいつも(手術後の経過が悪いのではないかと心配して)ドキドキします。なるべく驚かせないでください」と笑いながら医師(せいせい)が話しかけてきます。そうそう、手術の前には、「私は、名医でもヤブでもありませんが、スタンダードな腕をしていますが、任せてください」と言われ、その後でいろいろ説明してもらい、安心して手術をうけたように思います。そのせいも、信頼できるホームドクターかなと勝手に思いこんで整形外科にかかるときは、その病院へいくようにしています。

林檎かわいや
水巻町社会福祉協議会
藤田昌俊

「これに似たようなことで、私の場合、一度「いいな」と思うと食べ物、店、もの(道具)など執着してしまうことがあります。パソコンもその一つです。みなさんは、職場や家庭で、パソコンを使っていることと思います。ほとんどの人がWindows機ではないでしょうか。私は、職場ではWindowsも使いますが家庭では、Macを使っています。Windowsは、OSが頻繁にかわり、最近のMEとかXPとか少し触ってみました、98くらいのバージョンの方が扱いやすかったんじゃないのみたいな、気がしています。IT講習会に参加した人が、新しくパソコンを買ってわからないので教えてくださいますと来られても、「新しいOSの機能については、私もわかりません」と答えるのが関の山です。また、各社とも頻繁に機種を変更、添付ソフトはオンパレード、どれがいいのかわからない。ただ目移りするだけといった感じですが。景気のいい人はよく買い換えているようです。」

現在我が家にはMacが4台あります、使っているのは、古いデスクトップ型と、ノート型と、借り物のiMacです。(もう一台は、改造用にもらった物で周辺機器を乗せる台になっています。)古い機種でも用途がはっきりしていれば、それなりに十分活用できます。あるMac愛好家が「Macは新しい機種が出て欲しいなと思ったとき、買い換えるのではなく、買い足すんですよ」と言っていました。その気持ちもわかります。古いMacは、使えなくてもインターネットとして置いておきたいと思う物が結構あります。



マシン自体の話になってしまいました。〇〇も大変使いやすいように思います。初めて使った時には、目から鱗が落ちる気持ちでした。ある意味で、直感で触って使えたように思います。結構今でも、これでいいんじゃないかみたいな気持ちで使っていることは多いのですが・・・。

現代の目まぐるしく動く社会の中で、時代の流れに惑わされず、とことん使い込んでいける、そんなもの(道具)に会えたことを大変嬉しく思っています。

後ろの方で、時代の流れに流されず、しっかり仕事しろと言っています。そうですね、反省しています。

※Apple社のMacintoshを使っている人は少ないようです、困ったことがあったらお互いに相談しましょう。
ご連絡お待ちしております。メールアドレス mfufufu@mac.com

2001年を振り返って… 随想
三橋町社会福祉協議会
津留雅秀

2001年は、どれだけの多くの人が明るく穏やかな世紀になることを祈りつつ、新年を迎えたことだろう。ところが、新世紀への人々の期待と願望は、もろく崩れた。何ととっても、昨年の一歩の衝撃的な事件はアメリカ同時多発テロが発生したことである。民間機をハイジャックし、乗客もろとも超高層ビルに激突する。また、アメリカ国防総省もそのターゲットとなり、この事件は世界を震撼させた。私は、貿易センタービルに民間旅客機が激突するシーンのニュース映像を見たとき、まるで、アメリカ映画のスペクタクル場面でも見ているかのように思えた。このニューヨークで撮影された悲劇的なテロ集団の挑戦は、新しい世紀の脅威の形をあらわにし、人々を恐怖のどん底に陥れた。首謀者とその政権に対する国際的軍事行動が展開された。この同時テロは、人間の尊厳の根幹にか

かわる事件だった。貿易センター内の犠牲者には、日本人も含まれていた。世界経済の中核であるニューヨークでの事件は、単にアメリカ人だけではなく、多様な国々の犠牲者をだした。そして、この事件の影響は、アメリカ国内経済や国外経済へも及んだ。

もう一つのテロは、いわゆる白い粉によるバイオテロである。白い粉を入れた封書が、アメリカ議会やマスコミ関係者などの手元に送られた。5人の犠牲者の中には、接触経路が特定できない90代の老夫婦も含まれていたという。何とも相手の顔が見えない恐ろしい事件である。

このアメリカの一大事件には及ばないが、日本でも、大阪の小学校児童虐殺事件は、身近なところにおきた信じがたい痛ましい事件であった。一人の心の病がおこした事件で片付けられたらたまらないと、誰しもが思うだろう。安全であるはずの学校内でおきたことへの社会の不安は、計り知れないものがある。事故ではなく、事件だけに、人間の愚かな行動が残念でたまらない。

日本国内では長らく景気低迷のなかで、将来不安はますます募るばかり。そんななかで、面白い話題を提供してくれたのは、スポーツ界の快挙が相次いだことだ。世界的には、男子プロゴルフで、タイガー・ウッズ選手がマスターズトーナメントで勝利し史上初めてメジャー大会四連勝を達成した。アメリカ大リーグでは、ジャイアンツの

バリー・ボンズ外野手が73本の本塁打を放って今期引退したマグワイア選手の年間最多記録を塗り替えた。日本人選手も負けてはいない。何ととってもシアトル・マリナーズの佐々木投手とイチロー外野手の活躍は目を見張るものがあつた。なかでもイチロー外野手の活躍は、日本人のみならず、アメリカ人のファンをも魅了した。私の応援する日本のプロ野球軍団(S・L)は、残念ながら優勝をのがした。しかし、イチロー選手の場合は、格別で、この球団を応援しようと、本人の活躍が気になるのは、私だけではない。

スポーツ界の明るさに負けないよう、今年こそは日本を含め、世界の社会・経済に光がさすように望みたい。世紀は、人類が20世紀に残した課題にどう臨んでいくかが問われている。紛争や環境破壊を乗り越え、国際的融和を築き上げて、多様な人々を認め合い、個人の尊厳が確立される社会づくりにお互いがさらに努力していかなければならない。

ニューヨークの一日も早い復興と、犠牲者の家族の心の傷が、少しでも癒えることを祈りたい。



「私の喜びと生きがい」
三輪町社会福祉協議会

栗野 横 氏

ふりかえりますと、あつとゆうまに
本年三月退職を迎えることになりました。

私のホームヘルパー歴は十二年、さ
らに平成十年一月一日から地域福祉活
動専門員となりました。

今までは地域のお年寄りや、障害者
の方のお世話で週二〜三回訪問して参
りましたが、専門員を命ぜられた時は
何だか絆が切れた様な感じがしてショ
ックでした。

お年寄りからは「ヘルパーをやめて
も時々きてよね」と胸をうつような言
葉が出た。

「うん時々来るよ！元気にしとってね」
と私は答えた。しかし専門員になつて
みると、馴れない仕事で無我夢中でし
た。新しい仕事で一生懸命に動き回り、
お年寄りや障害者の方々に逢いに行く
ことはできなかつた。

両筑の地域福祉活動専門員の研修に
はつとめて出席し、皆さんの仲間に入
りいろんなアドバイスを受けながら多
くの事を学びました。

今日、高齢者社会となり、お年寄り
の問題に取組んでいます。これは何十
年か後、若い世代も直面する事であり
ますし、若い人自身の問題ということ

で長期を見すえての活動と思っていま
す。

福祉の仕事は、先駆的であり生き生
きとフアイトをもって実践し、住民の
みなさんからの信頼を得た時、何もの
にも替えられない充実感、さらに明日
への頑張りにと変わっていました。

自分らしく、人間らしく働ける事に
感謝し「させてもらっている」という
心を忘れず、喜びと生きがいへのサポ
ートが出来ればと願っています。

平成十二年度から介護保険が始まり、
社協職員も慌ただしく事業にとりくみ
ました。

お互い緊張感が高まり、大幅なヘル
パー増員や早急な制度の充実と共に事
業体制の確立をめざし、様々な取組み
が進むなか、不安と焦燥で胸いっぱい
の心境でした。

又、社協の新しい事業として、高齢
者を対象に地域の公民館を利用した「ミ
ニデイサービス」を実践する事になり
ました。平成八年頃から大刀洗町社協
や、杷木町社協、浮羽町社協などのミ
ニデイサービスの状況を視察し、その
アドバイスを受け漸く平成十三年度モ
デル地区として三区を予定して七月に
一区から立ち上げ現在八地区となり参
加者も増え盛り上がりを見せるようにな
りました。

やれやれと一息つくところに、この
度は「県南地区ボランティアのつどい」
を三輪町で開催することとなり、私の
最後の役割というか、大きな行事が舞

込み一瞬目の前が真っ暗になるほど戸
惑いました。

どういう準備体制をとったらよいの
かいろいろ考えました。平成12年度は
三輪町で開催されましたので、その県
南地区実行委員会に、石川事務局長と
一緒に参加し勉強させて頂きました。

地元として計画を立てるにあたって
は、県南地区実行委員、町の実行委員、
準備委員の人達と一緒に進めて
参りました。

県南地区会長中村氏、虹の会会長竹
中圭子氏、浮羽町社協國武氏等、多く
の方々のアドバイスを受けながら、計
画はどうか山を越しました。

これもひとえ皆様のお陰です、ご協
力に感謝を申し上げるばかりです。

私の人生を振り返ってみますと、多
くの方々と出会い、又触れあいができ
素晴らしいものであったと思っていま
す。

地域福祉活動専門員の人達との出会
いから始まり、ブロック研修、県社協
での研修、一泊研修での交流等、短い
四年間でしたが、忘れることができな
い多くの思い出が心に刻まれ、嬉しく
思っています。

私も退職後は、今までお世話になつ
た住民の皆さんに少しでも役に立ちた
いとの思いから、町社協へ登録されて
いる「ボランティア」の仲間に入り活
動しようと思っています。

それが「喜びと生きがい」として老
後を楽しく生きて行く事だと思つてお

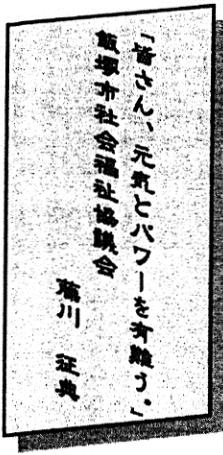
ります。

両筑社会福祉協議会の職員の皆さん、
お体に十分注意しながらご活躍されま
すことをお祈りしまして、私のお礼の
言葉といたします。ありがとうございます
ました。



第 9 回 全国社協職員のつどいに行ってきた (報告)

期 日 / 平成 14 年 2 月 9 日 (土)
会 場 / 大阪府社会福社会館 他



大阪まで行くなら何か必ず持って帰ってこなければと、思いを胸に秘め今回はじめて関コミ主催の「全国社協のつどい」参加させて頂きました。とにかく、関コミに行ってきたを見て

んないと言う社協先輩方の言葉の後押しと共に今回参加した「全国社協のつどい」では、自分にとって元気とパワーの源に出会えた事と、あらためて、自分は社協ワーカーなんだと再確認させられる「全国社協職員のつどい」でもありました。また、一つ一つの計画内容等にしても初めて見る研修ばかり、形式にとられない色々な研修方法のあり方(何かを求める者にしか与えない自由さや、優しさ)、自由奔放的な考え、アイデアや発想には、驚きと感動を覚えました。

そして、今日的な福祉課題への視点にも、とにかく、社協ワーカーとして考え学べるものが沢山あった「つどい」だったと感じています。

今回の「全国社協職員のつどい」では「地域福祉の時代に社協が描く福祉コミュニティの姿とは」と題し、各分科会、ワーカー、S LIVE トークが行われ、その各分科会での報告は、少し話が長くなりそうなので、他の福岡県内の参加された社協ワーカーさんに任せることにして、LIVE トークのお話をさせて頂きます。

このLIVE トークでは、各分科会に参加された方々一人一人にその感想を一文で紙に書いてもらい、その言葉の意味を本人の説明してもらおう企画で、(少しお酒がはいった状態で)会場も居酒屋風にアレンジした、トークショウの始まりである、酒も入っているせいか本音の意見、トークが展開され



た。

例えば「涙」「風」「望」「夢」等々と書かれた方々(すべての説明には、社協、福祉、住民と言った熱意が感じられた。)の熱心な説明が次々と始まり、「涙」と書かれた社協ワーカーの説明では、涙、涙の社協マン生活、涙はあったがその後には、喜びもあったと熱烈に説明をするワーカーもいれば、アルコールのせいとか、完全に頭の中はパニック状態の中で自分の書いた一文字とは全然違った話しを、顔に汗をだし一生懸命説明しているワーカーの熱弁に会場では笑いが耐えなかつたが、でも自分も、そして会場の皆さんも、その社協ワーカーが伝えたい意味が手にとるように理解出来ているようで、な

ぜか自分もうれしくなった。
半分出来上がり状態でのLIVE トークも終わり次は交流会です。

交流会では、運良く関西社協コミュニティワーカー協会会長山田早苗さんのお話を聞くことが出来た。まずはありきたりな挨拶から始まり、次に「全国社協職員のつどい」方向性や趣旨について話しを聞くことが出来ました。山田さんいわく、「全国社協職員のつどい」は、全国社協職員ワーカー皆さんの元気のみなものです。全国の社協ワーカー一人一人の思いを語り合い、学び合い、連携し、一つの意思を高め幅広いネットワークを作って行けたら、どんなにすばらしいでしょうと述べられていました。

社協ワーカーの思い、考えは、みな同じ、一人で悩まずみんなで考え語り合える場こそ今からの社協は必要なんですと言われた言葉には、私も共感と感動を覚えました。

この奥深い言葉の意味の中に、本年度実施した「福岡県社協職員のつどい」対し自分自身、そしてワーカーとしてこれだけの熱意の元にどれだけ自分が取組みが出来たか、関わったか、ただやればよいと言った曖昧な気持ちで取り組まなかっただろうかと、今一度考えさせられる思いになりました...

そこに横から出てきたのが浮羽町の若大将ではなくて、赤大将こと、國武

君である。そうばい、関コミのみんなのパワーには負けちよられんバイ・・。福岡の社協マンもみんな負けんごつかないかんバイ、いっそんなこつ関西に旋風を吹き荒れるや・・と一人で盛り上がっていました。

(この内容は浮羽町の赤大将國武君より報告があると思いますので後でお読みください。)

次に、大阪府立大学福祉学部専任講師 藤井博志先生とお会いすることが出来これまたラッキーでした。色々なお話をする中で、地区社協会長、役員の方々に地域福祉についてなかなか理解が、進まない、のですがという問いに、先生いわく、「地区社協、ネットワーク委員、福祉委員制度の母体となる組織づくりは、地域福祉や福祉ニーズを集約するてんにおいても非常に大切な部分であり、その組織体があるのと無いのでは大きく違ってくる」と。

それには、研修、視察、勉強会と色々あるでしょうが何よりも、地域住民の福祉活動とは何かを考えて、何度も、何度も勉強して行く事が必要だし、意味の無い研修だったら、しない方がまし。地域住民にしても本音で社協ワーカーがぶち当たれば必ず答えは帰ってくるはず、最後に社協ワーカーは夢を持って地域に飛び込んで行けという言葉はとても印象的でした。(有難うございました)

今回の「全国社協職員のつどい」では、これはほんの一部の報告ですが、

全国の社協ワーカーの皆さんから元気と、パワーを頂き元気づけられました。そして、京都市A区社協、村井さんの「段取り八分」のお話しとても勉強になりました。新任ワーカーの同窓会など、まだまだ、報告したいのですが紙面の関係上これで終わりたいと思います。

(浮羽町の國武君、来年もまた、パワーと元気をもらいに大阪いこうな・・)



2月9日関西コミュニティワーカー協会主催「全国社協職員のつどい」に予備知識もなく何もわからないまま大阪に行ってきました。

「つどい」の時間が短く、スケジュールもびっしりと詰まっていたこともありゆっくり話をすることは出来ませんでした。いい刺激をもらって帰ってきました。

私自身、知識も経験もなく毎日が手探りの状態ですが、同じように全国で頑張っている人達がたくさんいること。皆さんが地域に根づいた活動を目指していること。一番の収穫は、関西の皆さんの元気のよさでしょうか。ただ、

元気というわけではなく一人一人が何かしら目的意識をもっていることが伝わってきましたし、年齢を問わず上下関係・横の繋がりが強く関西の結束力のよさを見せ付けられました。

社協は、その土地・地域の色が出るため、運営や考え方もさまざまであり、業務の内容も異なるようです。しかし、「地域を少しでも良くしていく」という志は同じです。

「自分の地域のことだけ」と考えていた私にとっては、もっと広い視野をもつて取り組んで行かなくてはならないことを確認しました。それに、同じ考えを持っている人たちが全国にいるのは心強いことです。

今回の「つどい」で印象に残った言葉が2つあります。「バカになろう。」と「出る釘は打たれる。出すぎた釘は打たれない。出ない釘は腐れる。」です。この言葉を忘れず「出すぎた釘」になるように、バカになれるときにバカになれるように前向きに取り組んでいきたいです。

普段の業務で近隣の社協の方と会う機会もあまりなく、そう考えると全国の社協の方と会う機会に恵まれたことは帰ってきた今だからこそ貴重な経験であったと思います。

来年も参加したいと思っていますが、その時には福岡(九州)パワーを関西に見せ付けることが出来るようになればと思います。



私が参加したのは新人ワーカーを対象とした第3分科。4、5人のグループに分かれ、①社協に入って感じたギャップ・不安・不満②今、頑張っていること③仕事の中で一番励まされたこと④社協でチャレンジしたいことを挙げて行くことから始まりました。

地域性や業務内容は多少異なっても、感じたり考えたりする事は共通しているものが多く、何も関西のワーカーのみが特別な事をやっているのではないと感じました。

ただ、私に?福岡に?ないものはワーカー同士のつながりでしょうか。日頃の住民の方との会話に似た、町村社協、府県社協の域、また経験年数を超えたワーカー同士の盛んな会話がとても新鮮で、うらやましく感じました。会議や研修会で県内のワーカーの方とお会いする機会はあるのですが、挨拶程度の会話で満足していました。

あと違いと言えば、発想です。会議で発言したり質問したりするのはごく一部の人だけで、その人達だけが参加して、大半の人が受け身でただその場にいるだけになります。

分科会も基礎講座に参加し、つどい自体の雰囲気味わい、関西のワーカーの強い連帯感を見せつけられ、「関西の社協はいいなー、福岡もこんなになるといいなー」と思いながら帰ってきたのを記憶している。

福岡県でも「社協職員をつどい」が始まり、実行委員も二回経験させていたのだが、率直な意見として「その場かぎり」になつていないだろうか。「つどいを開催することが目的」になつていないだろうか。実行委員を経験された方々にも、もう一度考えていただきたい。

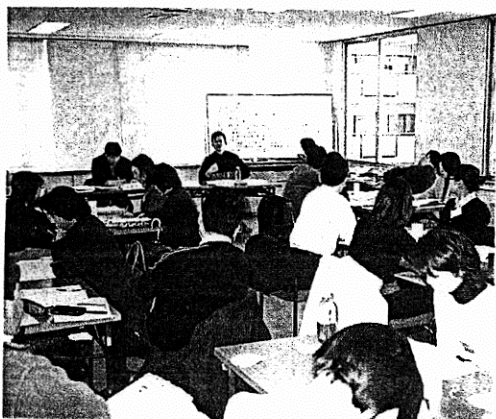
県地職連の事業は、「コミ研」「つどい」「まなこ」の大ききは三つの事業を行っている。「コミ研」は、毎月第三土曜日午後16時にコミュニティワークに係る様々な題材を基に、喧々囂々意見交換を行い、参加者各自は地元で有効なエッセンスを還元する。

「つどい」は、今までコミ研で取り上げたテーマを題材に、総合的な学習（語らい）の場を設け、地域活動職員のみならず、現場の職員や管理職なども含めて、お互いの立場を越え「社協」の話をする。

「まなこ」は、これら研修機会に残念ながら参加できなかった方々、また福岡県内外の関係の方々に状況を頂いていただき、第三者としてご意見を頂くという仕組みになつており、三事業が連携を持ちながら進んでいく必要があつた。

しかし現実には、役員ですら自分の担当事業以外、「内容がよく分からない」という方もおられる状況であり、その辺の温度差から、みんなが総合的に関わっていく「連携」の弱さや、みんなが主体的に盛り上がりつついく「熱意」が、関コミと比較するとあまり感じられない。

「比較するもんじゃな」と批判的に観る方もいるかも知れないが、どうしても関コミと比較せざるを得なく



らい、参加者みんなが「熱い」んだから：（経験もせずにごう言うより、まず、このつどいに行つてみてよ！）だからこそ、「全国のつどい」に参加した時には、関西のワーカー諸氏の、「強い連帯意識」や「個々の個性ある想い」に共感させられ、自分に向けて発せられる「熱い追い風」を強く感じる。

この「風」を受けた自分としては、我が故郷「福岡」「九州」に同じような風が吹くことを強く望むし、逆に全国に向けて「熱い熱い九州・福岡」のもとと熱い風を送りかえしたい。

「全国社協職員をつどい」と言うけれど、実質は過去9回関西の社協ワーカーが企画運営に専心していただき、我々はいつも「お客様」である。この現状を「おかしい」と思わないといけないと思う。

全国と言うからには、それぞれ全国各地の社協ワーカーが、企画段階から言いたい放題意見を出しながら関わり、地域性や問題の相違などを検討しつつ、本来の「全国」のつどいに育てていかなければ、今まで我々お客様で来させていただいていた「恩返し」が出来ない。

というより「関西人」だけに、この企画運営のプロセスを独り占めされる事が、もったいなくてたまらない。「九州人」だつて熱いのだ！「中・四国人」「関東人」「東北人」…だつて同じ事。

今回は一〇回とちょうど節目のつどいなので、この機に日本全国津々浦々のあちこちから吹く「熱い風」を「熱いうねり」に変えていきたい。これを読んだ方、一緒にやりましょう！連絡下さい！

編集後記

「まなこ」担当の一年間が終わり、ホッとしています。日頃思い悩むことがあります。

介護保険導入後、社協が運営体から経営体へと変わり、社協活動の根幹であるはずのコミュニティワーカーが介護保険業務との兼ね合いで、どうしても本来の活動や業務に対して、じつくり腰を据えられない状況ではなくなっている（必要性が弱くなっている）のではないのでしょうか。

しかし、そのような現状だからこそ、地職連の事業である毎月実施の「コミュニティワーク実践研究会」や年一回県社協と共催で行う「社協職員をつどい」には多数参加していただき、また、機関誌「まなこ」にも多く投稿していただき、そしてこれらの事業がみなさんの「交流の場」となれますよう、今後とも、みなさんのご協力をお願いいたします。